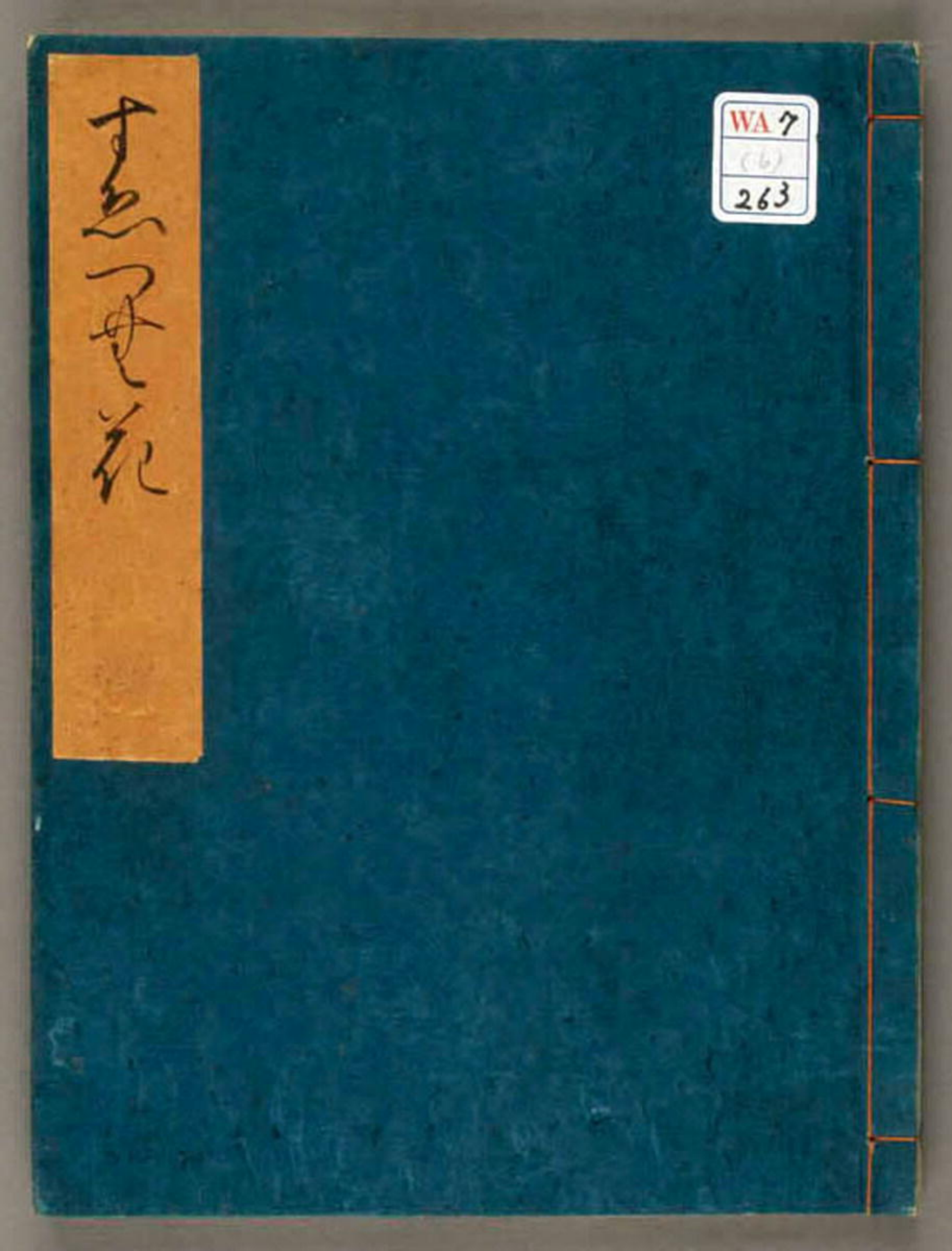
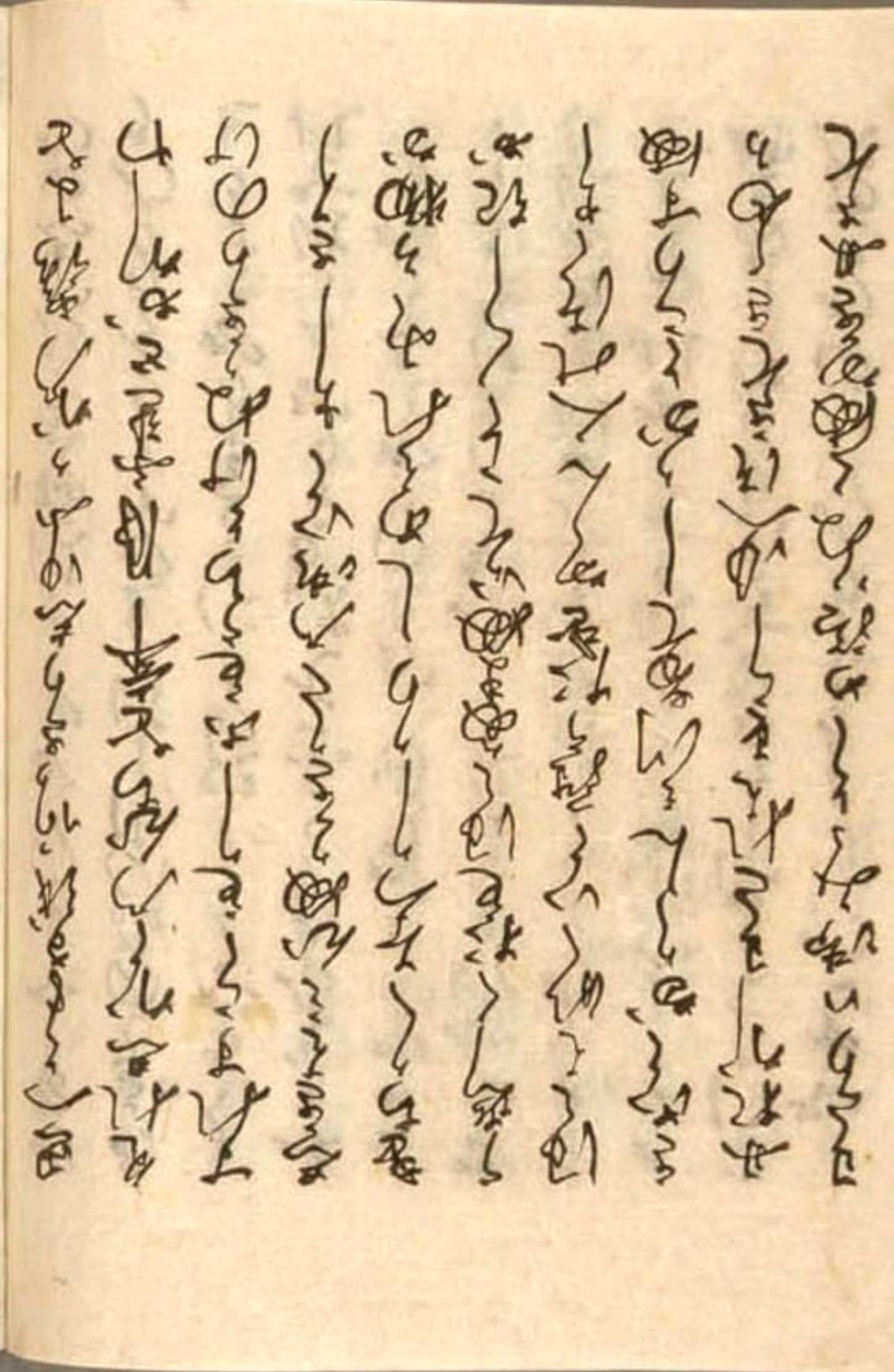
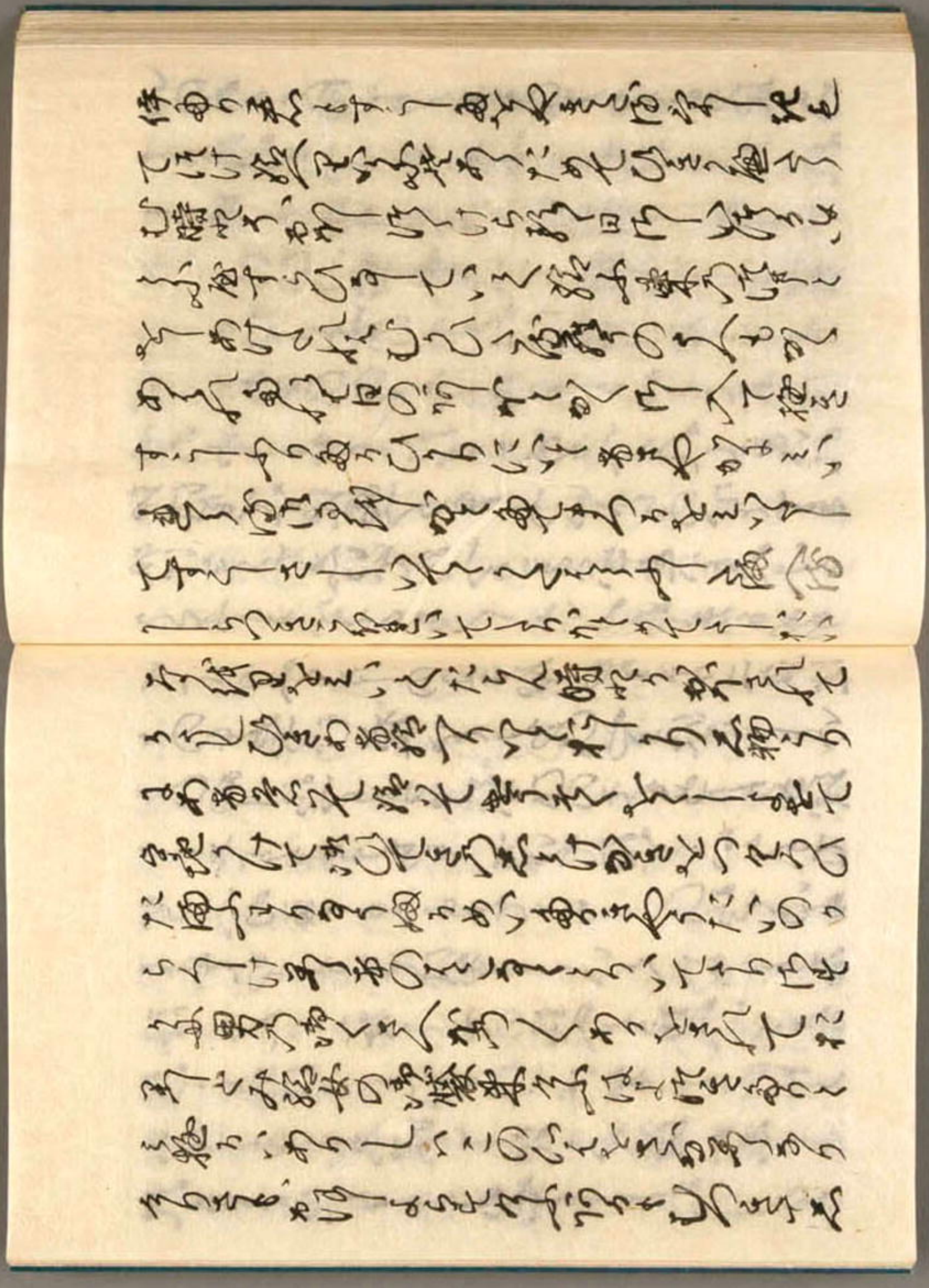
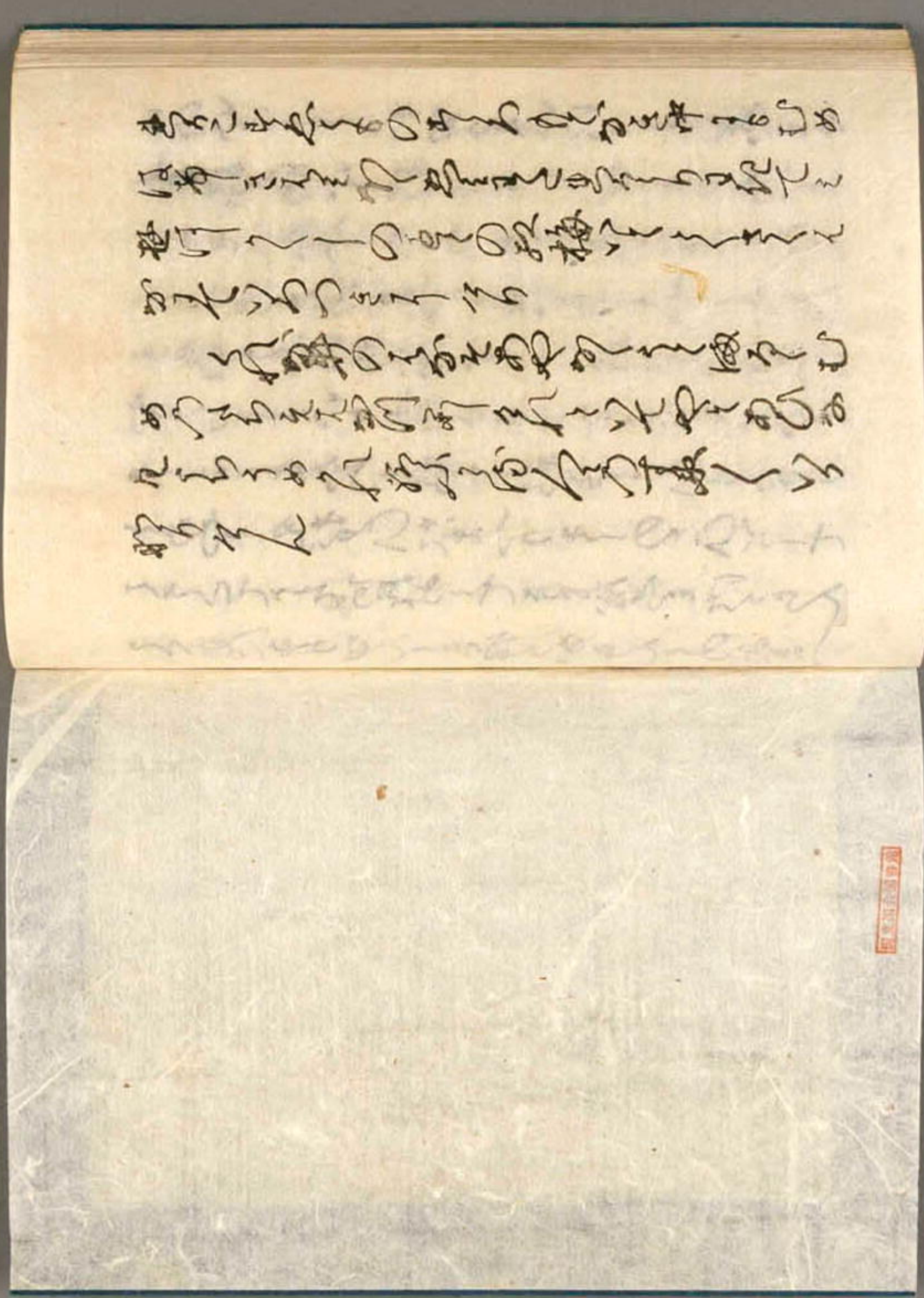

WA 7
(6)
263



まゝつたはりけるて心やすきひと里禄の
ところて理りひかりや肉らかての給つゝ
志ら無て給はきかり朱雀院の御事
申納かん楽人ささめらつゝきらしけ
給ひりし琵琶をとりて御さ庵中さんそ
かんまゑ御のかつりさいりぬ御身給
里ゝいてまつりけれはわたりはゆるさりと
ろく流ら給こはりひめしてまらうとりしも御
いり給ひてひきいくまたれとひろ母ふなま
つまろくまるとけて禄ひさけかりゝかめいて
給くい給事おかりゝて恨さこてなま
御てとゝおほくさゝめら給くひすて肉ゝり
はつゝひろ志給つりしこふて御みとゝ御に
といて給ゑておかりいてゝゆふつくそあり
けりあめかり侍てくゝわせ見とわたりか
さ殿とりさんとゝくさ給さます殿かりそんら
志おりて御つかとすさて命ふなりてく
かおしさ流さ御ゝかとなくなおひゝらさう
志くハ流おゝわれまちふゑ給りしう思ゝ給
け給てけさの流やをのくれぬ給ゝ中くと

とりてはんやらばまさる人のすゞ物ごし
やわらかきらうめ衣紋ふかふかまされらんせ
さゝ近ごろん我さへ心ゆきばうにさいてくろ
しくてやるとそりねまさり日ら思ふはつ
つてたいらん雨まさし乃そ記候ろくもやき
のふり逃てすわやし見ゐらをすくさ致んと
てかけ候つり女ゑうしら公ふ事物んと程
ふしろそゝ梅の花此文のこしかさの
心のうちくめとんすてゝとらひすさひていて
候ねうと命ぬえいうく恥おしく思ひしらね

んてはうお情ひくゆ忘そてとらめ行へ里
わろすさむき恵色付されりかい禄里これめろ
ろかのいろめひやかてはらむ御行く上りそ
のいゝかりしき性つてわまらうりれ事り
かこの中やかりかつる花をかりめりたる
の命ぬひ後のう様へ恥まりしらひはらんかて
かもえすべひし詠み御返事をまつりたれ
家りい女はつとひろく見めてゐろ
わをぬよ我へあつる中のうちてに
くき様くいかくみりみよく御意候さんく